

論壇：クリューガー国立公園で日本の One Health ブームについて思う

浅川満彦（酪農学園大学 獣医学群）

本拙稿を第10回アジア野生動物医学会の帰路、ボルネオ・クチン空港ラウンジで書いている。別媒体に投稿予定のもの書いていたのだが、書き進めているうちに、いわゆる One Health ブームについて感じたことが湧き上がってしまった。お付き合い頂きたい。

今、日本の獣医学や獣医師コミュニティーでは One Health が喧しい。そのこと自体、野生動物医学会の一会員として大歓迎である。なぜならば、関連データを積み重ね、One Health アプローチで分析し、最終的にヒト・有用動物・野生種含む自然生態系、全ての健康に目配せできる行為なので、この学会が求めていることの1つであるからだ。しかし、獣医学の関係者で積極的にこれに関わる姿が見え難いように感じていた。このことを直近の国際学会で再確認したので紹介したい。

2017年9月24日から28日まで、南アフリカ共和国のクリューガー国立公園 Kruger National Park (KNP) にて、The 3rd International Congress on Parasites of Wildlife (ICPOW) が開催された（詳細はこの学会名をキーワードで検索されたい）。ICPOW を訳すと「野生生物の寄生虫に関する国際会議」。これを獣医系ではなく医学系（日本寄生虫学会に相当する）研究団体が野生生物の名を冠した国際学会を運営している点に注目して欲し

い。ヒトや家畜における寄生虫病発生の根本的な原因が、直接・間接的に野生種に関わるという視点からなのである。南アフリカという土地柄もあろうが、まさに、One Health アプローチを分かり易い形で表現した学術集会と感じた。会期々間中、指定されたキャンプサイト内の会議場（写真1）付近のロッジ（写真2）に宿泊して学会参加となる。

事前登録は23ヶ国182名であったが、当日参加者を含めると300名は超えていたはずである。主催国を除くと、欧州（および豪州）勢が北米より多く、南米からの参加者も、とにかく元気な方が多いので目立っていた。アジアの参加者は劣勢ではあるが、学問的新興国からの研究者の姿もあった。そして、日本人の参加は…。結局、著者1人であった。

めげずに続けよう。一般講演数は208、セッション・カテゴリーとしては海洋および陸上生態系の寄生虫、哺乳類寄生虫の多様性、魚類寄生虫の分類・多様性・分布、小哺乳類における寄生虫の生態、獣医学領域の寄生虫（病）学、寄生虫の分子進化と生態、（多）宿主-（多）寄生体関係の生態、寄生虫病の診断、複雑な景観における寄生虫、医学分野の寄生虫（病）学（Zoonoses, One Health を含む；要旨集のママ）が設定されていた。対象寄生虫は原虫、蠕虫（蛭類含む）および節足動物（舌虫類・甲殻類含む）



写真1 ICPOW が開催された KNP 内指定キャンプ場コンフェレンス・センター、外観（左）と内部（右）



写真2 ICPOW 参加者が宿泊するKNP内指定キャンプ場ロッジ，外観（左）と周辺環境（右：野生のマカクが徘徊しているの，食料保管は念入りに。スーパーマーケットもあるので自炊可能。各ロッジの庭にはBQQ用コンロも有り）



写真3 サンセット・ドライブのスナップ（その1）
 サファリ用自動車道（左），昼（夕？）寝中のプチハイエナ（中央），自動車道を突然横切るアフリカゾウ（右）

がそれぞれ十分な数が揃い，日本の獣医学会の分科会のように原虫に集中するようなことは無かった。しかし，*Mycoplasma* のような細菌あるいは *Fusarium* のような真菌のみを対象にした発表も数題含まれていた。確認できた範囲では，そういった発表者はいずれも大学院生のような若者であった。絶対的に少数派なので孤立感を感じたら気の毒だなあと勝手に心配をしていたが，結局，野生動物を扱った研究なので会場は活況を呈した。

対象宿主は魚類，両生類，爬虫類，鳥類および哺乳類で，予想以上に魚類の演題が多かった。したがって，報告される寄生虫学名の付記命名者に Yamaguti（日本の寄生虫学を創立した偉大な

研究者のお一人，山口左伸 博士）のものが散見された。しかし，肝心（？）の日本人研究者の姿が会場に無い…。

それはともかく，予想通り，哺乳類に関する演題が多く，これは明らかにヒト・家畜を含むためである。しかし，公衆・家畜衛生系のセッションであっても，伝播経路や系統比較の関わりで free-ranging の種を最低でもどこかで絡めている（あるいは，そのように努力をしている）点で，他の学会との差別化をしていた。そして，日本人が筆頭演題は本学・野生動物医学センターの施設概要とそこで扱われた蠕虫症例の診断・疫学のトピック紹介であった。演題申し込み時に，「おそらく，日本人のエントリーは少



写真4 サンセット・ドライブのスナップ (その2)

夕闇のキリン (左), 宵闇の中, サファリ車搭載の専用照明灯に照らし出され得るシマウマとガゼル (中央), 夜になり俄然活発になったカバ (右)

ないので、細かい話は次回以降として、日本にも野生動物の寄生虫を調べているものも、いまだに、活躍していることだけを情宣する」と決めていた。そして、最先端のことは、他の日本の方にお任せのつもりであった。もっとも、要旨集を丹念に調べると、日本人が共同演者として貢献された演題が2つ(それぞれ帯広畜産大学および大分大学)あったことに安堵を憶えた。

繰り返すが、日本の獣医学界では One health が声高に叫ばれている。また、2017 年から正式運用の共用試験では、コアカリ科目野生動物学の内容も出題されている。この国際学会は、前述したが、One health を分かりやすく具現化した集まりの1つと見なせるであろう。ならば、なぜ、経済大国第3位の国が、こういった場でのスタンスを示さないのか? 次回は2020年。も

し、その頃も、熱しやすく冷めやすい人々の国に、One Health ブームが残っているとしたら、このような寂しい状況は避け、多くの参加を期したい。具体的には、野生動物医学会に所属し寄生虫(病)を専門にする方、あるいは、野生動物や園館動物・エキゾチックの細菌・真菌を扱う予定の方、参加を検討して欲しい。退屈な拙稿、ここまでお付き合い下さったお礼に、学会講演の午後、空いた時間に参加したサンセット・ドライブと称するサファリで撮影した下手な写真(写真3、写真4)を供覧して終わりたい(この他、早朝や深夜にもサファリは設定されているので、元気のある参加者は、講演をサボらなくても、すべて楽しんでいた。料金も1回2,000円程度)。